

2020年10月4日  
聖霊降臨後第18主日  
東京聖三一教会

イザヤ 5:1-7  
フィリピ 3:13-21  
マタイ 21:33-43

### 後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ

会衆参加の礼拝が再開され、とても嬉しく思います。けれども、相変わらずコロナが終息していないので、慎重な気持ちでもあります。皆さんも私と同じ気持ちであると思います。けれども、この礼拝を「神に喜ばれる霊的ないけにえ」として捧げれば、神様は喜ばれ、私たちに祝福を持って報いでくださるでしょう。

今日一緒に読んだ福音書の内容は理解難しいですし、理解できたとしてもその意味が重く感じられます。けれども、皆さんはそんなに負担に思わなくても構いません。なぜなら、この喩え話は、イエス様が律法学者とファリサイ派の人々を叱るためにおっしゃったみ言葉だからです。けれども、信仰者にとっては他人のための叱責も自分のためのみ言葉として理解し、受け入れるという点があり、それも素晴らしいことでしょう。それでは、どうしてイエス様はこの喩え話をなさったのでしょうか。

キリスト者は他宗教の信仰者たちとは異なり、契約を大切にしています。キリスト者は「契約の民」として、神様と契約を結んで生きていくからです。その契約は、私たちが神様のみ言葉通りに生きていけば、神様は私たちを「神の民」とし、常に守ってくださる、ということです。私たちは洗礼を受けてからこの契約の主人公になりました。

今日一緒に読んだ福音書の内容も契約と関わっています。福音書には書いてありませんが、ぶどう園の主人と農夫たちの間に契約があったからです。その契約は、農夫たちは収穫をして主人に納めなければならないということでした。この契約の後、主人はぶどう園を農夫たちに任せて旅に出てきました。ところで農夫たちはこの契約を疎かにしました。いいえ、契約を無視して主人が自分の収穫を受け取るために僕たちを送ると、農夫たちは彼ら殺しました。主人は再び他の僕たちを送りました。農夫たちはその僕たちをも殺してしまいました。すると、最後に主人は自分の息子を送り、今度は農夫たちが契約を守るようにと望みました。しかし、農夫たちはその息子さえ殺してしまいました。跡取りを殺せば、ぶどう園が自分たちのものになると思っていたのです。契約と人の命なんかどうでもいいと思っていたのです。けれども世の中は、この農夫たちが思ったようになるものではありません。

イエス様はこの喩え話の終わりにこのようにお尋ねになりました。

「ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか。」(21:40)

この問いに人々はこのように答えました。

「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸すにちがいない。」(21:41)

ぶどう園の主人は旅に出る前、農夫たちのためにすべてのことを用意しておきました。ぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらまでを立てました。ですから農夫たちの契約義務は簡単なものでした。ぶどうを収穫して実りの半分を主人に納めさえすればよいのでした。ところが、彼らは大きな考え違いをしていました。跡取りである息子を殺せば、ぶどう園が自分のものになると

思っていたのです。これは、目の前の利益に目が眩み、恩を仇で返すことに他なりません。今日と一緒に読んだイザヤ書には、このような現実を残念に思っておられる神様のみ心がこのように記されています。

「さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ、わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。」(イザヤ 5:3)

イエス様のこの喩え話で、ぶどう園の主人は神様であり、僕たちを農夫たちに送ったということは、神様が予言者たちをイスラエルの民らに送られたこと意味します。主人が息子を送ったことは、神様がこの世にイエス様を送られたことを意味します。そして息子を殺す出来事を通してイエス様がどうなるのかを示しています。イエス様がこのように喩え話をなされたのは、当時の宗教指導者たちが契約を破り、神様のみ言葉に逆らいながら生きていることを警告するためでした。けれども、この喩え話は彼らだけのためのものでしょうか。これは今日を生きていく私たちのためのみ言葉でもあります。今日の信仰者の中にも、当時の宗教指導者のように契約と神様のみ言葉を疎かにして生きている姿が多いからです。

「ロナルド・ロールハイザー」(Ronald Rolheiser)という霊性指導者は今日の多くの信仰者の姿をこのように言い表しています。

「聖なる者になりたがりながらも世の中の人々が経験しているすべての感覚的なものを味わいたがり、純潔で清らかな者になりたがりながらも快樂的なことを求めている。貧しい人に仕え、素朴な人生を送りたがっているながらも、富が与える安らぎを楽しんでさらに多くのものを持ちたがっている。お祈りが与えてくれる平安を分かっているながらも、きらびかに輝く忙しい生活を探している。」

このような様子を、息子を殺す姿に喩えることは行きすぎである、とおっしゃる方があるかもしれませんが。もちろんそうです。けれども、当時イスラエルの宗教指導者たちが神様との契約を破り、み言葉に従わずに生きてきたのは、目の前の経済的利益と既得権の維持、そして自己誇示を大事に思っていたからです。それを考えてみれば、快樂的できらびかに輝くものにしがみついた人々の姿と、目の前の利益だけを求めて契約を破った農夫たちの姿が全く違うとは言えないでしょう。

今日の福音書に出てくるぶどう園の主人はとても寛大な人でした。いいえ、農夫たちに正しい人生を教えるため僕と息子まで犠牲にするほど愚かな者でした。けれども、これがまさに心の痛みを感じながら、自分の民らを正しい道に導いていこうとなさる神様のみ心であるということが分かります。農夫たちがぶどう園を自分のものにしたとしても、幸せな人生になるでしょうか。もしかしたら、汗を流さずに得たものですから、勝手に無駄に使うかもしれません。いや、もしかしたら自分の利益ばかりだけ考え、農薬をたくさん使って、他人が食べられない見かけだけの良いぶどうを作り上げるかもしれません。そのような人生を良い人生であると言えるでしょうか？

農夫たちはぶどう園の主人が遠くにいて、目に見えないので、契約を疎かにしたのかもしれませんが。けれども、主人は生きているし、いつも見守っていました。考えてみれば、私たちの現実にも、この農夫たちのように、主人が遠くにいるように考えたり、主人がいないように考えて行動する人が多いのです。神様が見えないからと言って、み言葉や戒めがそんなに大事なことから考え、神様がいないかのように思って生きている人が多いのです。けれども、神様は生きておられます。私たちの人生の主人として、私たちがこの世の中で契約をしっかりと守りながら、信仰の民として生きていくことを願いながら見守ってください。ですから、私たちがみ言葉を守らずに生きていけば、私たちも収

穫を納めず息子までも殺してしまった農夫たちの姿に似通ってくるかもしれません。その時、イエスはこのように警告しながら、他の人々を「神の民」としてお選びになるかもしれません。

「言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。」(21:43)

もちろん、仕方なく現実と妥協し、やむを得ず神様のみ言葉を守り続けて生き難いことも多いです。その時、神様は私たちの心をご覧になるでしょう。なので、何より大事なことは心です。神様が望んでおられるのは、昨日は現実と妥協してしまいましたが、明日はしっかり生きていきようとする心であり、今日はみ言葉に背いてしまいましたが、明日はみ言葉を守りながら生きていくという心です。今日ご一緒に読んだフィリピ書を通して、使徒パウロはこのように私たちの進むべき方向を教えてください。

「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」(フィリピ 3:13b-14)

使徒パウロのこのような心を見習って、私たちもイエス様によって上へ召して、お与えになる賞を得るために走っていきましょう。今日再開したこの礼拝を迎え、私たちが神様のみ言葉と契約を守りながら生きていこうという心を捧げながら頑張っていけば、神様は私たちの人生を祝福してくださり、楽しさと喜びが満ちあふれるようにしてくださるでしょう。

この一週、神様のみ言葉と契約をきちんと守っていく人生を通して神様の恵みを豊かに受けられますように心からお祈りいたします。